

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「発達障害児を育てるということ」

著者は、自閉スペクトラム症のお子さんの父（柴田哲さん：発達心理学の大学教授）と、母（柴田コウさん：児童相談所の児童心理司）です。発達の専門家夫妻による子育てのエピソードを紹介します。

1 自閉症児の視線

自閉症の子の視線の合わなさは、人によって違う。一人の自閉症の子の中でも、成長過程によって様変わりしていく。

2 自閉症児の偏食

自閉症の偏食はわがままとは異なる。多くの自閉症の人が感覚過敏を抱えている。例えば、サクサク感じられる揚げ物の衣の食感が、チクチクした痛みを感じることもある。感覚過敏による偏食は、食べないのではなく、食べられないのである。

3 発達障害の診断（診断は医療行為に当たるので医師しかできない）

発達障害の診断は、原因からではなく、行動や情緒の状態（症状）を基に行う。こんな行動をしたり、情緒の問題があったりするという事は、〇〇という障害なのだろうという推測で診断がされる。発達障害は、実際生活で何にどのくらい困っているかで判断される。特別な工夫や支援が必要であるということが、障害か障害ではないかの違いである。

4 自閉症と視覚支援

自閉症児の中でも、視覚的支援の効果が大きな子と、それほどでもない子がいる。自閉症児には言葉の遅れが多いため、視覚的な手がかりが、言葉に比べて有効かもしれない。実際、視覚的支援は、定型発達の子に対しても小学校低学年くらいまではかなり有効である。我が子に必要なだったのは、視覚的支援よりも、言葉で順番に示してもらったり、納得いくように説明してもらったりすることだった。

5 自閉症の人のコミュニケーション能力

誰に対しても、どんな場面でも、です・ます調でしゃべることが多い。相手や場面に合わせて、話し方や距離感を柔軟に調整できない。一言で言うと「間」を取るのが難しい。「間」をうまく取れないのは、自閉症の人の根本的な障害とも言える。

6 規則正しい生活とパターン化への固執

自閉症児の場合、パターン化した行動が固着している可能性がある。いつものパターン化が崩れても、行動を柔軟に切り替える練習が必要である。例えば、時々いつも違うスケジュールを入れるなど、パターン化を意識的に崩したほうがいい。

7 先生の話が分からない

「次の時間は音楽なので、リコーダーを持って音楽室に行きなさい」といった目の前で指示されて、今すぐやることは分かる。しかし、「来週の音楽の時間は、体操服を着て体育館に集合」といった時間的に離れた、いつも違う出来事になると、かなり怪しくなる。特に中学校は、教科担任制なので、各教科に関する連絡が届きにくい。

8 自閉症児のための工夫

自閉症児にとって取り組みやすい授業とは、「パターン化された授業」である。最初に授業の流れをはっきり示すとともに、今はどの場面（段階）なのかを、マグネットで表示したり、場面転換の度に「次は～をします」と説明したりすると分かりやすい。



とれたて直送便



「見逃しは、無料配信の能代市HPで！」

「特別支援教育の扉」を能代市HP（観光・教育・文化→小中学校→特別支援教育→特別支援教育だより）に掲載しました。お気に入りのファイルをダウンロードしてご覧ください。